

R. シューマン《ユーゲントアルバム》Op. 68をめぐり一考察 (I)

—包括的な学びへと導くピアノ指導法を探る—

土 居 知 子

(教育学科教授)

はじめに

ピアノ指導の現場において、どのような教材を使用し、何に視点を定めて指導プロセスを踏んでいくか、多様な選択肢が存在する。特に、初心者指導の場合、その選択に因って、ピアノ学習者が習得できる音楽的要素や音楽以外の副次的要素、学ぶ目的意識や目指すべき到達点といったものも多様性を帯びてくる。昨今のピアノ教材・教本は、筆者の幼少時代には存在しなかったもの、あるいは一般的に認知されていなかったものも含めて、膨大な数に及んでいる。特に、初心者向けのピアノ教本においては、様々な工夫を凝らした挿絵やコメントが施され、ピアノ指導法研究や教材研究が活発に行われている成果が形となったものが多い。しかし、その一方で、P. チャイコフスキーやR. シューマン、D. カバレフスキー、B. バルトーク等が、初心者指導の目的で作曲した“古典的教材”とも言える子供のためのピアノ作品集（小品集）の数々も、スタンダードな教本としての需要は高い。時代が変わり学習者のニーズや目的がより多様化した現代においても、それらがもたらす教育的意義や効果が色褪せるといったことは決してないと思う。

本研究の目的は、ピアノ初心者指導の場で使用されることの多い、子供のための“古典的教材”の一つ、R. シューマン作曲《ユーゲントアルバム》Op. 68を題材に取り上げ、その有用性について様々な視点から考察し、音楽的要素のみならず、言葉や思考、文化や生活習慣に至るまでの様々な要素と音楽表現とを関連付けるピアノ指導法を追究していくことにある。この

曲集は、学ぶ者にシンプルなインスピレーションを与えるタイトルが付加されていることが大きな特徴であるが、最も注目すべき点は、第二版を出版する際の付録として、シューマン自身による箴言集「Musikalische Haus- und Lebensregeln（音楽的家訓と処世訓）」が付け加えられたことであろう。シューマンがこの曲集を通して子供たちに遺したかったメッセージは一体どのようなものなのであろうか。彼にとつての「音楽の座右銘」が楽譜に付加された意図を汲み取り、これらの文言の理解と実践へとつなげるピアノ指導法が確立し得るのか、各曲に付けられたタイトルも絡めながら、諸要素の“つながり”に視点を置いた考察を進めていきたい。

本稿では、まず《ユーゲントアルバム》Op. 68の成立背景を辿り、シューマンがこの曲集に込めた思いを紐解くことから始めたい。楽曲については、「第一部：幼い子供たちのために」（全18曲）を中心に切り上げて音楽的内容を分析し、楽曲と「音楽的家訓と処世訓」とを照らし合わせた包括的なピアノ指導法の可能性、情操教育としてのピアノ指導の在り方を模索していく。

I. R. シューマン《ユーゲントアルバム》Op. 68の成立背景

ローベルト・シューマン(Robert Schumann: 1810~1856)の音楽作品を概観すると、幾つかの時期に分かれる傾向とその特徴が浮かび上がってくる。創作活動を本格的に始めた1830年から1840年にかけては、クララ・ヴィークとの

出逢いによる人生上のドラマが創作に大きな影響を及ぼしたことにより、代表的なピアノ作品のほとんどがこの時期に生みだされた。楽曲ジャンルが一定の時期に偏る傾向があったシューマンだが、クララと結婚した1840年は“歌曲”の年、1841年は“交響曲”の年、1842年は“室内楽”の年、1843年は“オラトリオ”の年、と一般的に区分けされている。その後、1845年を境に、精神面での不安定さから脱するために移り住んだ新天地ドレスデンで、ピアノ作品の第二創作期を迎えることになった。

彼はクララとの間に8人の子供¹⁾に恵まれたが、おそらく、自身の先行きが明るいものではないことを見据えた上で、父親として何らかのメッセージを子供たちに遺したいという思いがあったに違いない。1848年、長女マリー7歳の誕生日の贈り物として作曲された《マリーのための誕生日のアルバム》に端を発し、様々な構想の下で曲が加えられ《子供たちのためのクリスマスのアルバム》へと発展した後、《ユーゲントアルバム（少年のためのアルバム）》Op. 68として計43曲が初版譜にまとめられた。自身の子供への贈り物、子供たちの“成長日記”の意味合いをも持つ曲集が生み出された背景には、より生活に根差した、シンプルでメッセージ性のある音楽を後世に遺したいというシューマンの新たな心境が映し出されていると考えられる。藤本は、シューマンが親しみやすい音楽の中で新しい方向に転じていったことについて、「そこにはジャン・パウルが教育書『レヴァナ』で語る言葉“子供たちは難しい約束事に縛られず、やさしい音楽の調べで友達といっしょになり、棘のない薔薇のつぼみになる”も響いていただろう」と見解を述べている²⁾。この後も、1849年には《小さな子供と大きな子供のための12の連弾曲集》Op. 85、1853年には《子供のための3つのソナタ》Op. 118、《子供の舞踏会》Op. 130といった、子供を対象としたピアノ曲集が次々と生み出されたことから、シューマンの一貫した姿勢が窺える。

初版譜に集められた43曲は、第一部「幼い子供たち（年少者）のために」18曲、第二部「年

上の子供たち（年長者）のために」25曲で構成されている。ほぼ全ての曲に標題がつけられ（第二部のうち3曲は無題）、それらは、子供たちが生活の中で遭遇する場面や経験した出来事に基づいていると考えられるシンプルなものが多いことが特徴として挙げられる。また第二版では、シューマンが創刊した音楽雑誌『新音楽時報（Neue Zeitschrift für Musik）』で発表した「音楽的家訓と处世訓（Musikalische Haus- und Lebensregeln）」が付録として加えられたことなどから、シューマンは作曲家としてのみならず、一人の家庭人として、なおかつ一教育者として、この曲集に特別な思いを注ぎ込んだと考えられる。この曲集を通して、“ピアノを弾くこと”を習得する以外に、言葉や体験といった副次的な要素を通した“内側からの気づき”といったものを、子供たちに、また、その周りにいる親やピアノ教育者といった大人たちにも提供したかったのでは、と筆者は推察する。

そこで、次節からこれらの要素について詳しく内容をみていながら、シューマンの教育的意図を探り、この曲集を用いた効果的なピアノ指導法について考察を進めていきたい。

Ⅱ. 《ユーゲントアルバム》Op. 68の考察

i) 楽曲の全体像

先に述べた通り、《ユーゲントアルバム》Op. 68は、第一部18曲、第二部25曲から成り立ち、それぞれに「幼い子供たち（年少者）のために」「年上の子供たち（年長者）のために」と副題が付けられている。本稿では、まず全体像を概観した後、楽曲構成を分析して特徴を抽出し、考察のベースに位置付けたい。

副題の名称からもわかるように、年齢や演奏技術、音楽的経験の変化や進歩に沿って学んでいけるよう構成され、子供たちでも簡単にイメージできるシンプルな標題が各曲に付けられていることが大きな特徴と言える。当初、シューマン自身の子供たちへの贈り物として作られた曲であったが、その目的は音楽教育だけではなく、家庭教育の一環としての多様な要素を盛り込みたかったのではないだろうか。

シューマンが作り上げた新たな視点について、西原は「平易な表現を用いつつ、深い表現を求めていく新しい世界で、ちょうど文学における児童文学とも似ている」と指摘している³⁾。

標題について考察を深めるために、筆者独自の視点で幾つかのカテゴリーを設定し、全体像の分類を行うことにした。

- ① 季節・行事・慣習などに関わる楽曲
- ② 物語的・文学的要素に関わる楽曲
- ③ 音楽用語・形式に関する楽曲
- ④ 民謡・踊りに関する楽曲
- ⑤ 感情に関わる楽曲
- ⑥ その他（無題）

上記のカテゴリーに照らし合わせ、全43曲を独自の見解で分類した結果が以下の通りである⁴⁾。

- ① 7.「狩人の歌」12.「サンタクローズのおじいさん」13.「愛らしい5月よ…」15.「春の歌」18.「刈入れる人の歌」24.「刈入れの歌」33.「ぶどうの季節～楽しい季節！」38.「冬Ⅰ」39.「冬Ⅱ」43.「おおみそか」
- ② 2.「兵士の行進」8.「勇敢な騎手」10.「楽しき農夫」17.「朝の散歩をすることも」19.「小さなロマンス」23.「騎手」25.「お芝居の思い出」28.「思い出」29.「見知らぬ人」31.「戦士の歌」32.「シェヘラザード」35.「ミニヨン」36.「イタリアの水夫の歌」37.「水夫の歌」
- ③ 1.「メロディ」3.「ハミング」4.「コラル」5.「小曲」9.「小さな民謡」14.「小さな練習曲」22.「ロンド」27.「カノン形式の歌」34.「主題」40.「小さなフーガ」42.「装飾されたコラル」
- ④ 9.「小さな民謡」11.「シチリアの踊り」20.「田舎の歌」41.「ノルウェーの歌」
- ⑤ 6.「あわれな孤児」16.「最初の悲しみ」
- ⑦ 21. 26. 30. （それぞれ「無題」）

これらの標題は、「家族のアルバム」あるいは「読んだ絵本の記録日記」のような様相を呈している。日常の中で交わされる親子の会話や、好奇心旺盛な子供の目や耳に届く事象が標題か

ら窺い知ることができる。以上のことから、シューマンは、音楽的な技術向上のみを目指したピアノ教本を出版することが第一目的ではなく、音楽家の視線というよりも、一家庭人の視線を通したメッセージや思い出を、楽譜という形で遺したかったのであろう、と推測できる。子供たちの周りにある「日常な生活や慣習」と照らし合わせて様々な情緒を呼び起こし、音を言葉や文字と結びつけてイメージを形にしていく作業を平易かつ的確に行える、“情操教育”の一材料となり得る作品を後世に遺したい意図があったのではないだろうか。季節の移ろい、それに伴う自然の変化や、行事・慣習、童話にでてくるような場面描写等、幼い子供でも理解できる「音楽による一冊の絵本」とも言い換えられよう。

更に、調や拍子といった音楽的要素にも着目したい。全43曲中、長調・短調の比は、27曲・16曲となっており、第一部では‘調号なし’‘調号一つ’が18曲中15曲と大半を占める一方、第二部では調号のないものが6曲のみとなっている。これにより、音楽的な成長段階を踏まえながら構成されていることが窺える。また、拍子については、4分の2拍子、4分の4拍子、8分の6拍子が中心で、4分の3拍子が一曲も存在しないことは興味深い事実である。この曲集に3拍子の楽曲が組み込まれなかった理由について明確には判らないが、日常生活の中での歩みの動作〈イチニ、イチニ〉、心臓の動き〈トクン、トクン〉など、子供でも本能的にその律動を認識できる偶数の拍子を選択したかったからではないか、と筆者は推測する。

ii) 音楽の三要素を柱とした楽曲考察と指導の観点

音楽にとって最も基本的な要素と言えば、「メロディー」「リズム」「ハーモニー」といった“音楽の三要素”であるが、これらをシンプルな素材を通して認識し、その性質を段階的に理解することが、幼い時期の最も重要な学習プロセスであると筆者は考える。ここで、筆者が授業やレッスンにおいて目標に据えている基本

三要素の在り方を示しておきたい。

- ① メロディーの役割を理解し、フレーズのまとまりを明確に表す
- ② リズムを頭脳と身体の両方で捉え、拍節感を身に付ける
- ③ ハーモニーの違いや変化を聴き分け、多声的な耳や手を育てる

これらの姿勢は、どのような段階、どのような楽曲に対しても有効であり、上記のような目標を指導者と学習者双方が念頭に置き、適宜確認しあうことが重要であると認識している。そもそも、この研究テーマを選択したきっかけは、筆者のこうした考えと、この曲集に内在していると思われる教育的意図に、何らかの一致がみられるのではないかとといった問いが生じたことに端を発している。そこで本節では、前節で概観した全体像から焦点を絞り、第一部「幼い子供たち（年少者）のために」に収められた冒頭5曲を中心にスポットを当て、盛り込まれた音楽的要素を抽出しながら、ピアノ指導の観点も含めた考察を行っていくことにする。

「1. メロディー」は、その標題通り、音楽の三大要素の一つを学ぶ楽曲として曲集の冒頭に置かれ、まずレガート奏法を習得することの重要性を示している〔譜例1〕⁵⁾。左右のバランスを聴いてハーモニーを形成することや、拍節感を伴って均等に拍を進めていく音楽的秩序、ピアノを弾くうえで基本となる心得を、まず最初のメッセージとしてシューマンが発信したかったのではないだろうか。「2. 兵士の行進」は、多声構造のハーモニーの変化や付点リズム、休符を伴う2拍子の拍子感など、多くの要素を結びつけながら学習できる楽曲である〔譜例2〕。音の鳴らない休符も音楽の一部であることを、リズムカルな要素と併せて伝えたかったのでは、と考える。「3. ハミング」は、右手の旋律とほぼ平行に動くハーモニーを感じ取らせ、2小節・4小節のフレーズのまとまりを、‘息’と重ね合わせながら習得させていくことのできる楽曲であろう。「歌うこと（ハミング）と弾くことは同じである」という感覚を、子供

たちに知ってもらいたい意図があったに違いない。指導場面では、どちらかのパートを歌いながらもう一方はピアノで演奏する、といったソルフェージュ能力を養う素材としての活用も可能であるとする〔譜例3〕。「4. コラール」は文字通り、4声体の和声感を指と耳で体験できる楽曲であるが、この類の曲が曲集のこの位置に置かれていることに、シューマンのねらいが隠れているのではないだろうか。歌うこと（声）と弾くこと（音）の共通項を早い時点で子供たちに認識させ、‘ピアノを弾く’といった作業にとどまらず、‘響きをつくる’という意識を明確にするねらいも含まれていたとの見方もできるであろう。また、指導の観点から考えると、曲の冒頭以外の強弱記号が一切書かれていないことから、和声進行に伴うエネルギー推移をもとにしたデュナーミク構成、ニュアンスの変化を考えさせる良い素材と成り得るのではないだろうか〔譜例4〕。「5. 小曲」は「メロディー」や「ハミング」と似た構造を持ち、これらの学習内容の復習と定着を兼ねた素材として位置づけられている可能性が考えられる。それに加えて、初めて‘アウフタクト’の要素が登場し、フレーズの強拍と弱拍の概念を意識させる新たな学びの要素を設定したことも注目に値するだろう。また、「コラール」と同様、冒頭以外に強弱記号が書かれていないため、楽曲中の抑揚づくり、物語の‘起承転結’に相当する表現を考える素材にも成り得る等、こうした多くの学びの要素が盛り込まれていると言えるのではないだろうか〔譜例5〕。

このように、冒頭に置かれた5曲を取り上げ

〔譜例1〕



〔譜例2〕



〔譜例 3〕



〔譜例 4〕



〔譜例 5〕



るだけでも、基本となる音楽の三要素がシンプルな形で盛り込まれ、段階的に学ばせる内容となっていることは明白である。これは、シューマンが学びにおける‘出発点’や‘原点’を重要視していたことを示す一つの答えなのかもしれない。さらに、これら5曲にはフレーズの反復が多く現れるが、こうした反復の形を取ることによって、シンプルな各要素が子供たちに認識されやすくなり、脳や手指に効率よく定着していく利点が見込まれることをシューマンは見通したうえで、楽曲の並べ方や全体構想をまとめていったのではないかと筆者は考える。

以上の5曲に続き、第一部はあと13曲存在するが、本稿では字数の都合上、残りの楽曲については譜例を示して概要を述べるにとどめたい。

「6. あわれな孤児」初めて登場する短調の曲（イ短調）。テンポの変化、強弱の細かい起伏によるメランコリックな表情が特徴的である。子供にも、明るく陽気な趣きだけではない感情の表現を学ばせたかったのではないだろうか〔譜例6〕。「7. 狩人の歌」8分の6拍子が初めて登場し、ユニゾン進行、強音によるスタッカート奏法が習得できる。ゲルマン民族の狩猟文化が音によって描かれている〔譜例7〕。「8. 勇敢な騎士」7番につづく8分の6拍子の曲で、全体的に共通項も多く、テクニックや音楽表現方法を系統立てて習得させたいという意図が垣

間見える〔譜例8〕。「9. 小さな民謡」冒頭の短調部分と中間部の長調部分の対比に、シューマンの‘オイゼビウスの’‘フロレスタンの’発想が見られる。相反するものが同時に存在する世界を子供たちにも示したかったのであろう〔譜例9〕。「10. 楽しき農夫」この曲集の中で、最も親しまれ良く演奏される曲。左手にメロディーが出てくる最初の曲でもある。農作業のあと家路をたどる農夫の足取りが、音によって表現されている〔譜例10〕。

〔譜例 6〕



〔譜例 7〕



〔譜例 8〕



〔譜例 9〕



〔譜例 10〕



「11. シチリアの踊り」短調ではあるが、民族舞踊のリズミカルな表情が特徴的。拍子が途中で変わることも（8分の6拍子→4分の2拍子）初めて出てくる要素として注目したい。様々な拍に付けられたアクセントの表情で、拍節感を表現することが求められる〔譜例11〕。

「12. サンタクローズのおじいさん」この標題は、当初《クリスマスのためのアルバム》として、また、四季を表す作品群として曲集が構想されたことに由来している。冒頭にメトロノーム速度が初めて表示されているのも注目すべきであろう。表現には「適切なテンポ」が必要不可欠であることを示したかったと考えられる〔譜例12〕。「13. 愛らしい五月よ…」ホ長調で書かれ、音楽的内容・テクニク面でも極めて難易度の高い曲である。ドイツ人にとって特別な感慨をもたらすと言われる「5月」という季節感と人々の高揚感が、この曲全体に漂っている〔譜例13〕。「14. 小さな練習曲」左右均等にフレーズを処理するといった手指のテクニクだけではなく、変化する和声感を捉える耳を育てる練習曲と位置付けたと考えられる。シューマンが敬愛するJ. S. バッハの平均律1巻第1番《プレリュード》と似た趣きがある〔譜例14〕。「15. 春の歌」13番と同様、春を表す調としてホ長調が用いられている。多声的な構造と、タイを伴う複雑なリズムに、シューマンの音楽語法が現れている〔譜例15〕。「16. 最初の悲しみ」感情を表す言葉が標題に付けられた曲。アウフタクトのリズムが中心で、本来の弱拍部分に重みかける「ため息」モチーフの表現が多く見られる〔譜例16〕。「17. 朝の散歩をするこども」16番に引き続き、アウフタクトのフレーズが中心となり、付点のリズムと3連符が特徴的な多声構造を持つ。音型の模倣といったシューマン独特の書法が見受けられる〔譜例17〕。「18. 刈入れる人の歌」秋の一風景を切り取ったような素朴な曲。転調感覚が養える曲とも捉えられる。もともとの曲集が、四季を描く作品群として構想された経緯を知ったうえで、音楽的要素のみならず、季節の変化や文化慣習についても興味を持ち、表現に反映させていく姿勢が求められるであろう〔譜例18〕。

〔譜例11〕



〔譜例12〕



〔譜例13〕



〔譜例14〕



〔譜例15〕



〔譜例16〕



〔譜例17〕



〔譜例18〕



Ⅲ. 「音楽的家訓と処世訓 (Musikalische Haus- und Lebensregeln)」

先に述べた通り、《ユーゲントアルバム》Op. 68の第二版で、シューマンが創刊した雑誌『新音楽時報 (Neue Zeitschrift für Musik)』で既に発表されていた箴言集「音楽的家訓と処世訓 (Musikalische Haus- und Lebensregeln)」が付録として加えられたことには、大きな意義が見いだせる。シューマンが「音楽」と「言葉」の双方を用いてこの曲集で伝えたかった最大かつ唯一のテーマは「音楽を志すもの、音楽を楽しむものが心得ておくべき基本的姿勢や具体的事項」であったと考える。しかし、「音楽」と「言葉」は、決して別の要素として並列的に楽譜に収められたわけではなく、相互に「つながり」や「かわり」を持たせ、諸要素の融合をはかった包括的な学びの必要性を伝えたかったに違いないと推察する。ここで、音楽教育と家庭教育、加えて人間教育にもつながるシューマンの試みを探るために、「音楽的家訓と処世訓」の一部を以下に抜粋して紹介する⁶⁾。

- ◎聴く耳を養うことが最も大切です。早い時期から調性や音を判断できるよう心がけなさい。鐘、窓ガラス、カッコウの鳴き声—それらがどのような音を出しているかを聴き分けなさい。
- ◎拍子通りに弾きなさい。多くのヴィルトゥオーゾの演奏は、まるで酔っ払いが歩いているようです。そのような人々をお手本としないでください。
- ◎小さい頃から和声の基礎を勉強しなさい。
- ◎易しい作品を上手に美しく弾くよう、努力しなさい。難しいものをいい加減に弾くよりずっと良いです。
- ◎一日の音楽の勉強を終えて疲れたと感じたら、もう続けて無理をしないように。喜びも新鮮さもなしに勉強するよりは、休息の方がマシです。
- ◎焼き菓子や砂糖菓子の甘いものでは子供を健康な人間に育て上げることはできません。肉体的な糧と同様、精神的な糧も素朴で力強い

ものでなくてははいけません。大家たちは後者のものを充分に取りましたが、皆さんもこれを取り入れてください。

- ◎優れた作曲家の作品の一部を変えたり、削除したり新たな流行装飾を付け加えたりするのは良くないことと考えなさい。それは、芸術に対する最大の侮辱です。
- ◎仲間の中で、あなたよりもっと多くのことを知っている人を探しなさい。
- ◎熱心に詩人の本を読んで、音楽の勉強の疲れを癒しなさい。そして、時々戸外を散歩しなさい。
- ◎あらゆる民謡を熱心に聴きなさい。それらは美しい旋律の宝庫でもあり、またあなたに様々な国民性を見せてくれます。
- ◎古いものを尊敬しなさい。しかし、新しいものにも温かい心で接しなさい。知らない名前に対して、先入観を持つてはいけません。
- ◎生活の中において、自分の周りをしっかり観察しておきなさい。他の芸術や学問においてもそうであるように…。
- ◎道徳のおきては、芸術のおきてでもあります。
- ◎学ぶことに終わりはありません。

これらは、音楽に関する箴言であると同時に、生活のなかでの“気づき”の大切さや物事の見方、心の持ち様も同時に示唆していると言える。シューマンは、音楽と向かい合う時も、楽譜上に書かれた音符や記号を音にする時も、経験や学びから得た内側からの“気づき”をもとに、思考と表現の一体性を図る音楽教育を早い時期から試みるが必要不可欠である、と後世に伝えたかったのではないだろうか。

Ⅳ. 総合考察と今後の展望

ここまで、R. シューマン作曲《ユーゲントアルバム》Op. 68を題材に、第一部の楽曲内容と第二版の付録として加えられた『音楽的家訓と処世訓』を照らし合わせ、様々な視点から考察を進めてきた。その結果、音楽的要素のみならず、言葉や思考、文化や生活習慣に至るまでの多様な要素と音楽表現との関連付けを目指す

教材として、《ユーゲントアルバム》が編纂され、早期の音楽教育の理想の在り方をシューマンが後世に問い続けているのではないかとの考えに至った。しかし、音楽・文字・言葉・生活体験等を融合させ、包括的な学びや気づきへと導くピアノ指導法は、この曲集の特徴を踏まえてそれらを有効に活かすことで、初めて実現できると考える。例えば、季節・行事・慣習などに関わる楽曲を学ぶときは、それらに関わる話題を指導の際に充分に取り入れ、体験の下に育まれた五感を通した理解を音楽表現につなげていく工夫をすべきであろう。あるいは、テクニク的な問題の解決が難しいケースや練習状況が思わしくないケースに遭遇した場合、直接の指導者からの言葉としてではなく、作曲者シューマン自身からの「呼びかけ」や「指導」として、『音楽的家訓と処世訓』の中の関連性のある文言を用いることにより、作曲者の言葉に触発された‘内側からの気づき’を生み出す結果につながっていくのでは、と期待する。

今回、楽曲については、43曲全てを取り上げることができなかったが、引き続き、第二部‘年上の子供たち（年長者）のために’25曲にも焦点を当てて考察を深め、シューマンの意図を反映させたこの曲集の活用法や指導法の確立を目指していきたい。一方、今回の研究を通して、新たな研究の視点が浮かび上がってくる一つの成果を得ることができた。本研究におけるキーワードとして“つながり”“かかわり”“気づき”等が挙げられるが、これらの言葉が、近年多くの分野で注目されている「ホリスティック教育」のキーワードと一致することを発見した点である。ジョン・P・ミラーが提唱した「ホリスティック教育」の定義を、今後の新たな研究に向けた一材料として最後に示しておきたい⁷⁾。

ホリスティック教育は、〈かかわり〉に焦点を当てた教育である。すなわち、論理的思考と直観との〈かかわり〉、心と身体の〈かかわり〉、知の様々な分野の〈かかわり〉、個人とコミュニティとの〈かかわり〉、そして自我と自己と

の〈かかわり〉など。ホリスティック教育においては、学習者はこれらの〈かかわり〉を深く追求し、この〈かかわり〉に目覚めるとともに、その〈かかわり〉をより適切なものに変容していくために必要な力を得る。

「ホリスティック教育」とは一体どのようなものであるのか、まだ全く見通せていない部分が多く存在する未知の分野であるが、これまでの研究の延長線上に「ホリスティック教育」の視点を絡めて、新たなピアノ指導法の可能性を追究していくことに筆者は興味を抱き始めた。今後は、その教育の理念、現状と課題について等、「ホリスティック教育」に関する知見を広げていき、ピアノ指導現場における応用とその実践について、研究を進めていきたいと考えている。

註

- 1) そのうち、長男エミールはシューマンが37歳の時に1歳で亡くなり、四男フェリックスは1854年、シューマン自殺未遂の末に精神病院へ収容された後に生まれている。
- 2) 藤本一子『作曲家 人と作品シリーズ シューマン』（音楽之友社、2008）p. 164
- 3) 西原稔『シューマン 全ピアノ作品の研究 下』（音楽之友社、2013）p. 277
- 4) 標題と番号は、『シューマン こどものためのアルバム 作品68 Paul Badura-Skoda 編集 原典版』（音楽之友社、1973）を参照した。
- 5) 本稿における譜例作成にあたっては、ウィーン原典版『シューマン こどものためのアルバム 作品68』（音楽之友社、1979）を参照した。
- 6) 和訳は筆者によるものである。
- 7) ミラー、ジョン・P〔吉田敦彦・中川吉晴・手塚郁恵訳〕『ホリスティック教育 いのちのつながりを求めて』（春秋社、1994）p. 8

引用および参考文献

- 〈事典・書籍〉
- ・柴田南雄・遠山一行総監修（1993-1995）『ニューグロブ世界音楽大事典』講談社
 - ・芹沢尚子（1999）『作曲家別名曲ライブラリー ②③シューマン』音楽之友社
 - ・西原稔（2013）『シューマン 全ピアノ作品の研究 上・下』音楽之友社
 - ・藤本一子（2008）『作曲家 人と作品シリーズ

シューマン』音楽之友社

- ・ホリスティック教育研究会編（1995）『ホリスティック教育入門』柏樹社
- ・ミラー, ジョン・P [吉田敦彦・中川吉晴・手塚郁恵訳]（1994）『ホリスティック教育 いのちのつながりを求めて』春秋社

〈論文〉

- ・下田好行（2013）「ホーリズムの視点に立った授業開発：課題解決のための協同的・表現的・創造的な学びを通して」『東洋大学文学部紀要教育学科編』第39号

〈楽譜〉

- ・ウィーン原典版（1979）『シューマン こどものためのアルバム 作品68』音楽之友社
- ・音楽之友社（1973）『シューマン こどものためのアルバム 作品68』Paul Badura-Skoda 編集 原典版

〈インターネット〉

- ・「Musikalische Haus- und Lebensregeln」
http://www.schumannzwickau.de/zitate_lebensregeln.asp（2016年10月21日閲覧）